

## 平成25年度 女性に対する暴力防止フォーラム

と き：平成25年10月31日(木) 13:30~15:30

ところ：奈良県文化会館 2階小ホール (奈良市登大路町6-2)

### 「家族の絆を考えるーDV・子どもへの虐待をとおしてー」

講師：信田さよ子さん(原宿カウンセリングセンター所長)

#### ● カウンセリングセンターの特徴

一般的に、カウンセリングでは「共感・傾聴」ということを勉強するのですが、原宿カウンセリングセンターでは、「加害・被害」という視点から相談者に対応します。「家族」のなかでは「力の強い・弱い」、「支配する・される」という事実が厳然としてあります。

「家族」というものは、社会・政治の縮図です。不況になれば、経済的に逼迫する。経済的に逼迫すれば父親の機嫌が悪くなるし、女性が結婚して子どもを妊娠し経済力を失うと、夫婦関係は大きく変わっていきます。「家族は愛情」と言うと、シビアな「支配・権力」、「加害・被害」というものを見えなくさせてしまいます。

カウンセリングではあらゆる力関係、暴力の「加害・被害」の『被害』を受ける立場に立つ」ということが、1番の基本です。被害者支援と加害者臨床をともに単一のカウンセリング機関でおこなっているというところは日本でも原宿カウンセリングセンターだけではないかと思います。

#### ● 家族の出発点、家族の健康診断

2011年3月11日東日本大震災以降、「家族の絆」の強調がありました。

「家族の健康診断」は何かと言えば、一般的には「夫婦の関係がすべてを決める」と言われています。

お子さんの問題を扱うグループカウンセリングを毎週実施していると、夫婦の関係が崩壊しているということを感じています。夫婦の関係がどういう風に維持されているかということが実は家族全体を規定してしまうのです。

#### ● 家族内暴力という統一的視点

家族のなかでの暴力をみてみますと、「DV」、「虐待」、「老人虐待」、「同胞の暴力」(兄、姉から弟妹への暴力)などがあります。「家族」というものは、「絆」といいますが、容易に暴力が発生しやすい集団だと言うこともいえます。

#### ● 児童虐待の種類

児童虐待の種類は、「身体的虐待」、「ネグレクト」、「心理的虐待」、「性的虐待」と「DVの目撃」です。「ネグレクト」という虐待は、衣食は足りていますが、子どもを育てない、さまざまな理由で育てられない、つまり育児放棄を指します。「言葉による虐待」、「性的虐待」は深刻な虐待です。そして、「DVの目撃」です。私が理事長を務めるNPO法人主催では、DV被害を受けた母子のプログラムを実施しています。

#### ● DVの種類

DVの種類では、「身体的暴力」はDVのなかで1番分かりやすい。1番わかりにくいのは

は「無視」というものです。妻に全く関心がないということです。「性的暴力」も多いのですが、なかなか第三者には話しづらいのが事実で表面化しにくいものです。「身体的暴力」は「言葉の暴力」とセットになって行使される場合がほとんどです。被害を受ける女性は20代から80代まで、あらゆる年齢層にわたります。

「言葉の暴力」で一番多いのは「おまえ誰のお陰で食べられているんだ」、「おまえの仕事なんて趣味だろ」等と言われたりすることです。言ってる本人はDVとの自覚などなく当たり前のことを言っているだけだと思っているのですが、言われた妻は忘れられないほど傷つきます。

DVが始まる時期とよく言われるのは、新婚3ヶ月です。妻がそろそろ、自分のものになったなという頃、もしくは、妻が妊娠してつわりがひどくて仕事を辞めた途端、子どもを産んで自由がきかなくなるところから始まったりします。日本の社会は男性のほうが、働きやすくできていますから、女性が弱者になった、つまり男性のほうが力を持った途端にDVは生まれます。また男性が失職したりして経済基盤を失ったとたんにDVをふるうようになることもあります。このように、DVは個人の性格というより、男らしさというジェンダーの問題や社会の変動が影響するのです。

DV被害者でカウンセリングセンターに来る女性の7割は身体的暴力のない人です。言葉、経済力、脅迫、巧みな脅迫、いろいろなものが組み合わさっていたりします。

### ● DV被害者・加害者への対応

原宿カウンセリングセンターではDV被害者のグループを2つに分けています。私は「AG1」、もう一人のスタッフが「AG2」を担当しています。どう違うかという、私の担当グループは、別居から調停、裁判、離婚成立、面会交流といった具体的な対応や介入を必要な女性たちを対象としています。いくら逃げても、子供がいたら、死ぬまで他人として生きられる保障はありません。

東京をはじめとして主要都市では、面会交流を支援する機関ができつつあります。それらの機関が媒介になって、被害者と元夫が直接会うことなく、子どもとの交流を支援してくれます。月一回の頻度が一般的になりつつありますが、面会交流は子どもを連れて離婚した女性にとって、負担があります。

これまでのカウンセリング経験から、DVというものは、10年単位での支援が必要だというのが自説です。「DVかな」と思うところから始まり、お互いが別の人生を楽に送れるようになるには、特に子供がいたりすると難しいところがあります。それには、長期にわたる支援者が必要だと思います。

「AG2」は「同居している夫が変わってくれるなら、このまま夫との生活を続けたい」という女性のためのグループです。DVに関する知識を得るために、DV加害者プログラムの教材をそのまま使用します。DVを知ることが全ての基本です。DVはそれを行使する男性の問題であり、被害を受けている女性の問題ではありません。男性が暴力をやめて、もしくは暴力的な言動をやめて、妻と互いに尊重しあうような対応をしてくれれば問題は解決するのです。

実際に暴力を受けている人が自分の受けていることを「私が悪い」のではなく「あれはDVなのだ」と考えることはすごく大切です。DV被害者は、ほぼ全員が「自分の対応が

下手だからだ」と思っているのです。「私をもっと上手に夫に対応できれば、夫は暴力などふるわない」と考え、自分を責めています。自信がなくなるにつれ、相手の暴力的な態度を誘発するようになります。悪循環です。大切なことは「夫の振る舞いは暴力だ」と定義することが、すべての出発点です。認知を転換していかなければなりません。

「DV加害者」に対しては、DV加害者プログラムを実施する RRP 研究会があります。私が理事長を務めています。男性の精神科医2名、女性臨床心理士3名で構成され、大学研究室、支援機関等を中心に実習生が記録担当します。グループは2名の男女のファシリテーターで実施されます。

RRP 研究会では、2004年以來、カナダから講師を呼び、加害者プログラムやDV被害を受けた母子プログラムの研修会を開催したり、カナダ、オーストラリアなどの視察を繰り返してきました。研修会には全国から参加される方がいます。

### ● 虐待事例、DV事例から学ぶ

DVも虐待も加害者は無自覚です。夫は「しつけ」、「愛情表現」、「夫婦喧嘩」だと思っています。ところが被害者の側は愛情だと思っていない。妻は「恐怖」を感じています。一番DVを特徴付けることは「恐怖」です。でも、多くの妻は怖がっている風に見えません。彼女のプライドから、怖いけれど元気にふるまっているのです。

恐怖は、絶えず不安を呼びます。恐怖のうえには緊張と不安があります。緊張と不安はすごくエネルギーがあるので、どこかほっとできず、落ち着かない雰囲気を生み出します。家庭のなかがいつも緊張と不安に満ちていると、お母さんの緊張と不安は子供に伝染します。夫の立場に立てば「DV」ではない。妻の立場に立つと「DV」になる。このようにDVは見えたり見えなかったりするのです。誰の立場に立つのかということが問われるのです。性被害でもそうです。

常識にとらわれずに、「被害者の立場に立つ」ということをしないと、支援はできません。

### ● 子どもに問題が起きたとき

子供に問題がおきたときは、夫婦の関係を点検しなければなりません。夫婦が協力できたときに問題解決することが多いのです。

### ● 家族は愛情共同体だろうか

殺人事件を検察庁が集計しますが、去年は57%が家族のなかでおきているのです。このことは、強調されなければなりません。

### ● 家族の大黒柱は、「いい夫でなければ、いい父親となりえない。」

家族の大黒柱は夫婦関係です。家族は、父親と夫（つまり男性）で決まると言ってもいいかもしれません。特に「引きこもり」はお父さんで変わります。お父さんが本人に対して説教することで変わるのではなく、お父さんがお母さんを支えることで変わります。「君も大変だったね、君もがんばってきたね、協力するよ。」と妻のほうを向くということです。いい夫でなければいいお父さんにはなりません。

### ● 父から息子への世代間連鎖

最後にどうしても伝えなければならないことです。「世代間連鎖」という言葉がありますが、実は「世代間連鎖」で問題になるのは父から息子です。父から母へのDVを目撃してきた息子の多くは、結婚して妻を殴ります。DV加害者プログラムの参加者の90%以上

が父のDVを見えています。「世代間連鎖」というものは男性の問題ということ覚えておいていただきたいと思います。

● **望ましい家族とは？男性しだいかも？！**

望ましい家族は、最後になりますが、とりあえず「暴力がない家族」です。子供が安心できる家族です。

家族は、男性次第かと思います。簡単に言うと力関係が平準化されるように努めなければならぬということです。ただでさえ、日本では管理職も国会議員も男性が多く、今でもはるかに男性が有利にできているのです。制度や仕組みがそうなっていることは事実なのです。だから男性のほうを持てる力を自覚し、意図的に自分の位置を下げる必要があるでしょう。